



イタルダ ITARDA INFORMATION インフォメーション

2011年
特別号
春

<http://www.itarda.or.jp>



春になると自転車の事故が増えます

これから暖かくなると、自転車で出かけるのに良い季節になり、自転車による交通事故の増加が心配されます。事実、年齢が低いほど冬から春にかけて、自転車事故の発生件数が急増する傾向にあります（図1）。（18歳以上では一年を通じてほぼ一定で推移しています。）

今号では、自転車事故を起こさないために、どういうことに気をつければ良いかについて説明します。

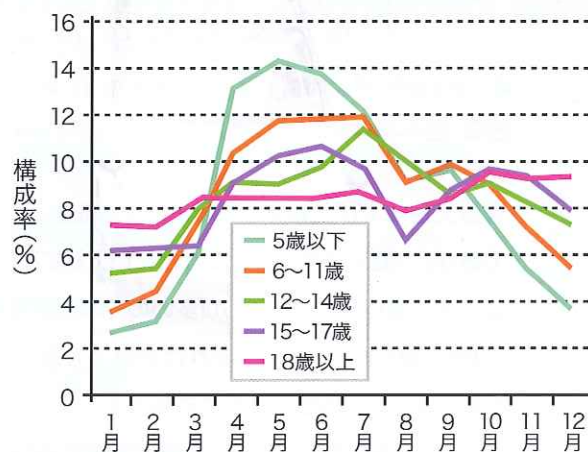


図1 自転車事故の月別発生状況 (H13~H21)

財団法人交通事故総合分析センターは、交通事故と「人間」「道路」「車両」について、科学的・総合的な調査・分析や研究をおこなって交通事故の防止と被害の軽減を図り、快適な道路交通環境の実現に寄与することを目的に設立されました。

つくば市には交通事故総合分析センターの「交通事故調査事務所」があります。つくば事務所では、実際の事故現場で事故の状況を調査していますが、この事故調査は交通事故の低減を目的とした調査・研究のためのもので、警察の捜査や保険会社の調査とは全く別のものです。



調査中の事故調査員



財団法人 交通事故総合分析センター
Institute for Traffic Accident Research and Data Analysis

歩道での自転車事故が多く発生しています

図2には自転車と四輪車の交通事故が発生した場所別の割合を示しています。交差点内、車道が多いことが目につきますが、歩道も～10%を占め、自転車の運転者が高齢になるほどその割合は高くなっています。



図3 自転車対歩行者事故の発生場所 (H13～H21)

道路交通法では四輪車も自転車も歩道を通行することは原則として許されていないのに、何が起きているのでしょうか。歩道であっても駐車場やコンビニなどに入出入りするため、四輪車が歩道を横切ることはいくらでもあります。こういう出入り口は目立たず見通しも悪いところが多いので事故になりやすいです。自転車について考えてみますと、やむを得ない事情があるか、「自転車通行可」の標識があれば歩道上の通行は認められていますし、あるいは「自転車は原則車道通行」というルールそのものを知らない人もいるのかも知れません。さらに自転車運転者は、歩道上ということで油断し易いことも影響しています。このような事故を防ぐには自転車で歩道を通行しなければ良いのですが、

①止むを得ず通行する場合でも、できるだけ車道に近い位置を安全な速度で通行する。

②歩道は歩行者のものであることを肝に銘じ、徐行又は降りて利用する。速く走りたいのなら車道を走行すると良いでしょう。



図2 自転車対四輪車事故の発生場所 (H13～H21)

図3には自転車と歩行者の交通事故が発生した場所別の割合を示しました。11歳以下では駐車場なども無視できませんが、年齢を問わず単路(歩道)の割合が高いことがわかります。ここでも多くの自転車が歩道を通行している現状が見えてきます。

右側通行をすると事故に遭う確率が高くなります

図4は単路を直進していた四輪車と自転車の事故を、自転車の通行位置別に整理したものです。自転車は、道路の左端に沿って通行しないといけないのですが、現実には約半数の自転車は道路の右端に沿って通行し事故に遭っていることがわかります。自転車による右側通行は、本人にとって危険なばかりではなく、他のルールを守って道路の左側を通行する四輪車や自転車にとっても非常に迷惑になるのです。

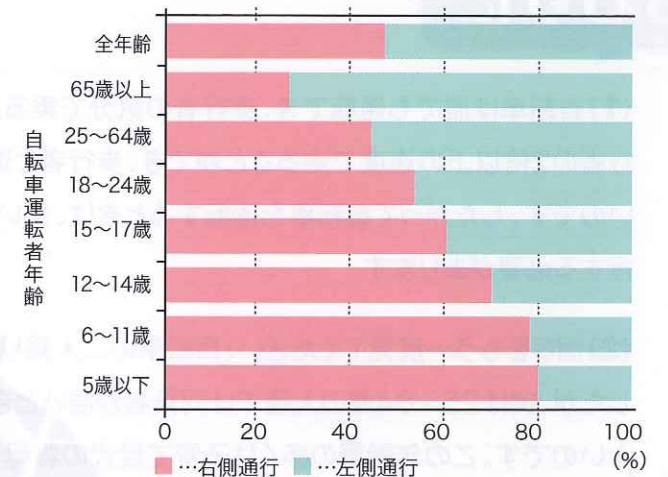


図4 自転車事故の道路右側通行状況 (H13～H21)

夜間に自転車がライトを点灯することにより対面する歩行者事故が少なくなります

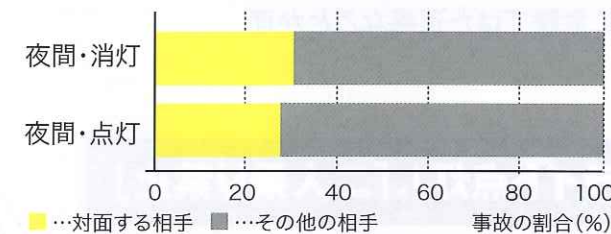


図5 自転車のライト点灯の効果 (H19～H21)

図5には夜間の自転車対歩行者の事故について、自転車のライト点灯の有無に分けて、自転車のライトが見える「対面する相手」との事故の割合を示しました。夜間・消灯に比べて夜間・点灯では「対面する相手」との事故の割合が低くなっています。すなわち、ライトを点灯すると相手から見えやすくなり、事故が起きにくいということです。

自転車での二人乗りは、死亡重傷事故率が高くなります

図6には自転車の同乗者の有無別に、死亡重傷事故率を整理しました。図6からわかるように、17歳以下の小中高生に相当する人は、同乗者を乗せていると死亡重傷事故率が1.2～1.5倍にもなることです。この年代の人は、自分と同年代の人を同乗させることが多く、同乗者の体重により自転車の安定性が損なわれる傾向にあること、仲間同士ということで羽目を外した運転をしがちであること、が原因と考えられます。

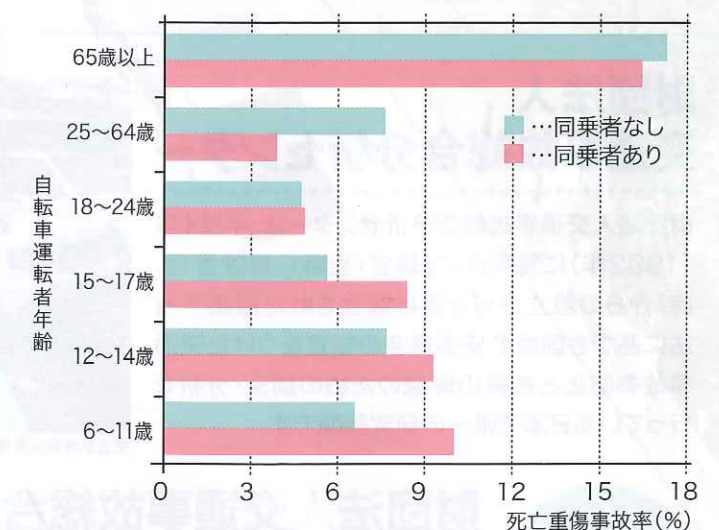


図6 自転車に同乗者が居るときの危険性 (H13～H21)

$$\text{死亡重傷事故率(\%)} = \frac{(\text{死亡事故件数} + \text{重傷事故件数})}{\text{全自転車事故件数}} \times 100$$

交通事故調査へのご協力をお願いいたします。

おわりに

(1) 自転車は誰でも運転でき、歩行者の気分で乗る人が多いようです。しかし、本当は歩行者の2倍以上の速度で走ることができ、歩行者と違って何かあってもすぐには止まれないのです。したがって自転車を運転するときは、歩いているときの2倍以上も先を見て走行する必要があります。

(2) 図6をもう一度見てください、自転車の二人乗りは重大な事故になり易いと説明しましたが、実は25～64歳の人達では同乗者が居るときの方が、重大な事故になることが少ないのです。この年齢層の多くは子育て世代のお母さん、お父さんで、幼児を同乗させていて事故に遭った人達だということがわかっています。すなわち体重の軽い幼児ではあるけれど、同乗者が居るという不利な状況でも、より慎重な運転に心がけることにより重大な事故を防止できることを教えています。

(3) 自転車も含め、車両はすべて共通のルールを守ることが義務づけられています。そのような中で一人だけルールを守らないということは、いかに危険ではた迷惑なことか理解できるでしょう。

絶対に守ろう、「道路の左側通行」、「車道通行」、「ライト点灯」、「二人乗り禁止」

財団法人 交通事故総合分析センター

財団法人交通事故総合分析センターは、平成4年(1992年)に警察庁、運輸省(当時)、建設省(当時)からの設立許可を受け設立された道路交通法に基づき国家公安委員会の指定を受けた交通事故の防止と被害の軽減のための調査・分析を行っている日本で唯一の研究機関です。



交通事故総合分析センターの調査車両は緊急自動車に指定されています

お問合せ先

財団法人交通事故総合分析センター

●ホームページ <http://www.itarda.or.jp> ●Eメール koho@itarda.or.jp

つくば交通事故調査事務所

〒305-0831

つくば市西大橋641-1 (財)日本自動車研究所内

TEL029-855-9021 / FAX029-855-9131

事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町6-6 麹町東急ビル5階

TEL03-3515-2525 / FAX03-3515-2519